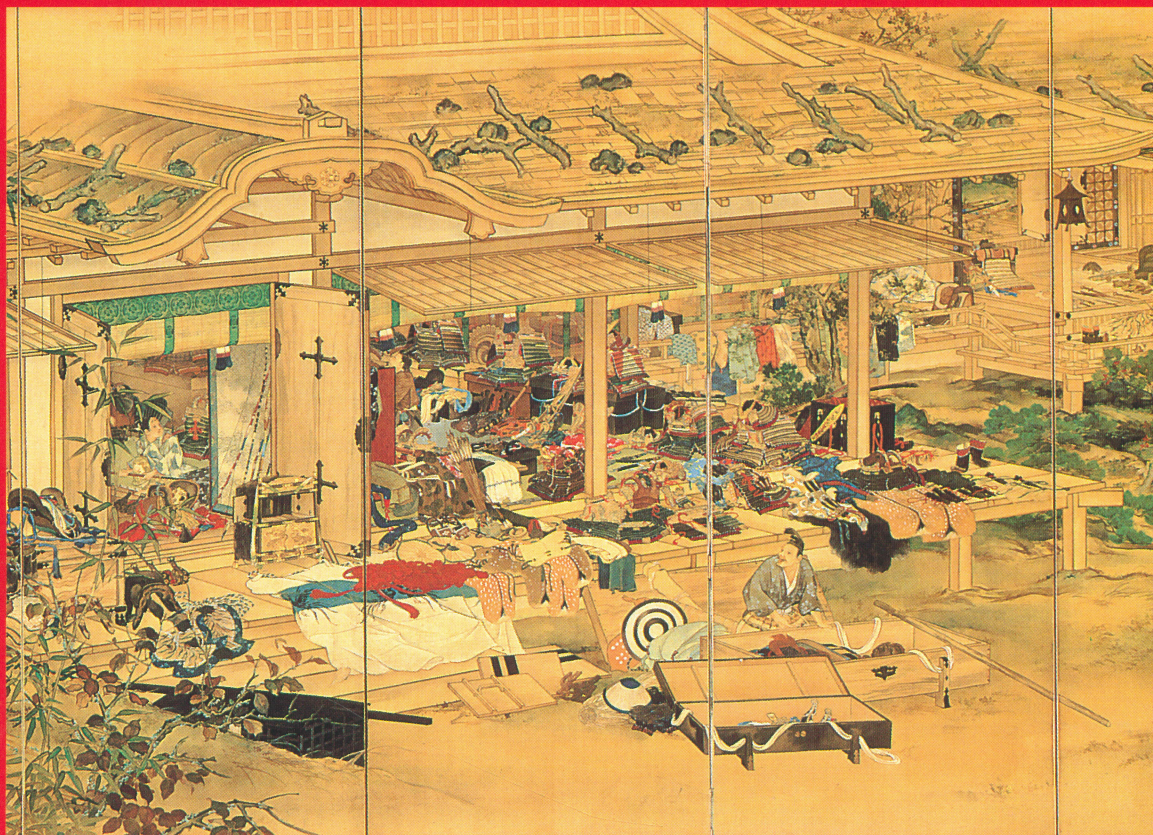


博物館NEWS
ニュース

守住勇魚筆 武具・文具曝涼図屏風 (明治33年)

(川島織物文化館蔵)

もりずみいさな
守住勇魚 (1854~1927) は、徳島藩の御用絵師であった守住貞魚つらなの息子で、工部美術学校こうぶに学び、同志社や京都工芸高等学校で教員を勤めた。この屏風は、綴錦壁掛けの原画として描かれたもので、完成した壁掛けは宮内省からイギリス王室に贈られた。古代から明治にいたるさまざまな武

具・甲冑が並べられ、物尽くしの面白さがある。勇魚の代表作である。

企画展「阿波の近世絵画一面壇をささえた御用絵師たち」より。

大橋俊雄 (学芸員：美術工芸担当)

鳴門海峡にのぞむ漁業と製塩のムラ—亀浦遺跡—

高島芳弘

はじめに

縄文時代は狩りと漁、弥生時代は米づくりという図式で理解する考え方はまだまだ根深く、弥生時代以降の生業の話をする場合、狩りや漁は米づくりほどには大きく取り上げられませんでした。しかし、西日本では弥生時代になって土錘を使った網漁、タコ壺漁、土器製塩などが新たに発展したことも事実です。

漁業を取り上げる場合に、当時のごみ捨て場である貝塚から出土する貝や獣骨・魚骨などの食べカスから狩りや漁の対象となった動物を推定する方法と、石錘・土錘、釣り針、ヤス・モリ、製塩土器などから漁法を復元する方法とがあります。

徳島県の場合、どちらの方法をとるにしても資料が少なく、そのうえ遺跡は県北東部の鳴門市から徳島市にかけての海岸部に集中しています。

昨年の8月の下旬、当館の天羽副館長が徳島県の漁業史関連の調査で亀浦漁港付近を歩いている時に、偶然に亀浦遺跡を発見しました。この遺跡も県北東部の遺跡ですが、新たな例を加えるということでここに紹介します。

遺跡の立地と調査経過

亀浦遺跡は鳴門市鳴門町土佐泊福池に所在し、南に向かって伸びる砂嘴さしとこれに囲まれた入り江に立地しています(図1)。遺物は工事によって

入り江の海底から浚しゅんせつされた盛り土の中からたくさん見つかりました。また入り江の海底でも遺物は確認できます。海面下の遺跡として大変めずらしい例となります。

遺跡を発見した時に多量の遺物を採集したほか、後に鳴門市教育委員会と共同で数回の表面採集を行いました。さらに鳴門市教育委員会は、砂嘴部分で発掘調査を行いました。

採集遺物

採集された遺物は土器・陶磁器類と石鏃などの剥片石器、石錘・土錘、製塩土器などです。ここでは土器と土錘、製塩土器について簡単に紹介しておきます。

土器・陶磁器類で多いのは縄文土器です。胴部に稜りょうをもち、口縁が外に反り返った浅鉢と、突帯文の深鉢が大部分で、縄文時代晩期の中ごろから後半のものと考えられます。

弥生土器、土師器、須恵器も採集されましたが、量が少なく胴部の細片ばかりで詳しい時期がほとんどわかりません。土錘や製塩土器などが盛んに使われていた弥生時代や古墳時代の土器が少ないのはひじょうに残念です。ほかに、中世の瓦器がきわん碗、18世紀中葉から後半の肥前染付、19世紀の大谷焼きなども採集されました。

土錘は網の重りとして使われます。網そのもの

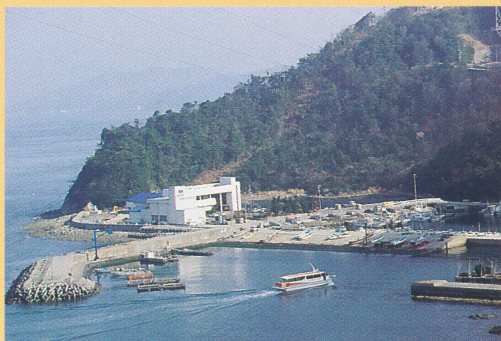


図1 亀浦遺跡の遠景。



図2 土錘(網の重り)。

はまったく出土例がなく、網の規模や構造などは詳しくわかりませんが、引き網や刺し網の重りとして使われていたのでしょうか。

亀浦遺跡では合計30点ほどの土錘が発見されており、溝を持つものと管状のものがあります(図2)。溝を持つものは大形で、管状のものは形と大きさで3タイプに分けられます。一つは大形で両端を平坦に切り落としているもの、もう一つは大形で両端に丸みのあるもの、三つめは小形で断面が紡錘形のもので、これらは弥生時代以降に使われたものと考えられますが、詳しい時期は不明です。

製塩には海水を濃縮する採鹹さいかんと、これを煮つめる煎熬せんごうの過程があります。製塩土器はこの煎熬の時に使われた土器です。瀬戸内では、弥生時代中期に土器製塩がはじまり、平安時代まで続けられました。時期によって製塩土器の形が異なり、弥生時代中期～古墳時代前半には逆円錐形やワイングラス状の胴部に脚台を持つものが使われ、5世紀後半から丸底の深鉢が使い始められました。

亀浦遺跡の製塩土器(図3)は、底部破片で見ると、すべて脚台を持つもので胴部はほとんど失われています。しっかりと踏ん張りの利いた脚台のほかに薄くきゃしゃなもの、脚台の低くなったものもあります。しっかりと脚台を持つものは外面にタタキ、内面にハケメが施される場合が



図3 製塩土器(濃縮した海水を煮つめる)。

あります。亀浦遺跡から出土した脚台を持つ製塩土器は弥生時代終末～古墳時代中ごろのものと思われま。

製塩遺跡では、製塩炉とともに大量に廃棄された製塩土器が発見されます。亀浦遺跡からは、このような状態で製塩土器が見つかっていないので、ここで大規模な土器製塩を行っていたとは断定できません。しかし、入り江対岸にある古墳時代後期の製塩遺跡である福池遺跡に先行する製塩遺跡である可能性もあり注目に値します。

漁業遺跡と古墳群

鳴門海峡付近にはほかにもいくつか漁業遺跡が知られており、その近くの丘陵には遺跡に対応するように古墳群がつくられています。徳島では日出湾ひでに面した日出遺跡・日出古墳群が有名です。また、淡路島の西淡町伊毘いびには、製塩遺跡である伊毘遺跡に対応するように鑑崎古墳群・しだまる古墳群、沖ノ島古墳群がつくられています。

沖ノ島古墳群は横穴式石室と小竪穴石室あわせて20基ほどからなる群集墳です。ここには釣り針、土錘、軽石製浮子、タコ壺形土製品などが副葬されており、海を生業の場とする海人の墓であることがよくわかります。鳴門海峡に面した古墳の多くは沖ノ島古墳群と同じように製塩や漁業にたずさわった海人の墓であったのでしょうか。

おわりに

亀浦遺跡の発見によって、縄文時代晩期中ごろにはすでにここに人がすみ始めたこと、弥生時代以降になって網漁業が行われ、さらに土器製塩も行われるようになった可能性があることがわかりました。また、鳴門海峡を挟んで海人による交流があったに違いないと想像しています。

(主任学芸員：考古担当)

山にすむドジョウーナガレホトケドジョウー

ナガレホトケドジョウという体長6cmほどの、あまり聞きなれない名前のドジョウをご存知でしょうか(図1)。聞きなれないのも当然で、1993年にこの名前が付けられたばかりです。たぶんその姿をご覧になった方はほとんどいないでしょう。でも徳島県にはわりと普通に生息しており、阿讃山脈を源流とする吉野川北岸の支流にとくに多く生息するほか、穴吹川(高橋弘明氏私信)や鮎喰川、もっと南の園瀬川、那賀川、桑野川、椿川、日和佐川などでも確認されています。今回はそのちょっと変わったドジョウを紹介しましょう。

ドジョウの仲間(コイ目ドジョウ科)にはロヒゲがありますが、ホトケドジョウ類(属)では、それが4対あるのが特徴です。従来、この類は北海道に分布するエゾホトケドジョウと本州・四国に分布するホトケドジョウの2種とされてきました。それが最近になって徳島県を含む瀬戸内海周辺に分布するホトケドジョウが別種だと認められるようになり、ナガレホトケドジョウという別の名前が与えられるようになったのです。

このドジョウと徳島との関係は深く、名前こそ付けなかったものの、徳島のホトケドジョウが本州東部のそれと異なっていること最初に気付いたのは、当時徳島農業高校におられた故藤田光先生と大川健次先生でした。このことは「日本産ホトケドジョウの地理的変異について(予報)」として1975年の魚類学雑誌に発表されています。大川先生たちの徳島淡水魚研究会は、今でもナガレホトケドジョウの分

布など積極的に調査しています。

さて、ナガレホトケドジョウが他のドジョウ類ともっとも異なるのは、その生息場所です。普通ドジョウというと沼や用水路にいることを思い浮かべますが、ナガレホトケドジョウの場合、山の中の源流付近の沢に限られています(図2)。水量が少なく、水深は数cmしかないこともあり、川底は岩やレキでおおわれています。森の中なので、昼なお暗いといった感じです。当然、そんな場所に他の魚はすめません。せいぜいハゼ科のカワヨシノボリとコイ科のカワムツB型の幼魚がいればよい方で、魚はナガレホトケドジョウだけということも珍しくありません。

生活史はほとんどわかっていませんが、春ごろに産卵し、一生をほぼ同じ場所で生活するものと思われます。水槽で飼育すると、わりと泳ぎ回りますが、野外ではたいてい石の下にひそんでいます。体形をみると、全体に細長く、頭部は上下に押しつぶしたような形をしており、石のすき間に入り込むのにいかにも都合がよさそうです。手網をひそんでいそうな石の横に当てがい、石をめくって、手で追い込むと簡単に採集できます。皆さんも近くの山へ出かけたなら、ナガレホトケドジョウがないか探してみてください。

佐藤陽一(主任学芸員:脊椎動物担当)



図1 ナガレホトケドジョウ(穴吹川産)。高橋弘明氏撮影、水槽内写真。



図2 椿川支流の生息場所(阿南市椿町)。

新着資料(一部)の紹介 (1996年11月~1997年2月)

動物 伊予灘産魚類標本(寄贈)

考古 宮谷古墳出土三角縁神獣鏡複製(購入)

植物 高藤茂植物標本コレクション(寄贈)

民俗 箱廻し用具(購入) 羽織(寄贈)

阿波の近世絵画—画壇をささえた御用絵師たち—

阿波国において絵師の活躍が盛んになるのは江戸時代からですが、それは蜂須賀家が積極的に絵師を招き抱えたのがきっかけでした。

当時幕府や大名は、居館の装飾や手持ち品のデザイン、贈答など、さまざまな場で絵画を必要としました。しかしこれらの絵画は格式があり、将軍や大名の好みにかなう必要があったので、誰にでも描けるわけではありませんでした。そこで専属の絵師を養成し、制作に当たらせました。彼らを一般に御用絵師と呼びます。

この企画展では、阿波の御用絵師とその後継者の作品と資料を約60件展示します。

●おもな展示品

- 狩野探幽 漢武帝・西王母・林和靖図 (東京国立博物館)
- 狩野栄信 関羽・山水図 (東京国立博物館)
- 佐々木信之丞 涅槃図 (観音寺)
- 矢野常博 釈迦十六善神像 (丈六寺)
- 河野栄寿 梅山水図 (個人)
- 中山養福 鶴・旭に松図 (徳島県立博物館)
- 渡辺広輝 竹に鶏図 (徳島市立徳島城博物館)
- 守住貫魚 仁徳帝高屋図 (個人)
- 鈴木芙蓉 那智山大瀑雨景図 (静嘉堂文庫美術館)
- 守住勇魚 武具・文具曝涼図屏風 (川島織物文化館)

●会期

平成9年4月22日(火)～5月18日(日)
ただし、4月28日(月)と5月6日(火)・12日(月)は休館

●会場

徳島県立博物館 企画展示室

●観覧料

大人	200円(160円)
高校・大学生	100円(80円)
小学生・中学生	50円(40円)

カッコ内は20名以上の団体

企画展関連行事

(1) 記念講演会：御用絵師と「お好み」

講師 松原 茂氏 (東京国立博物館絵画室長)
 日時 5月11日(日) 午後1時30分～3時
 会場 県立21世紀館イベントホール (入場無料)

(2) 展示解説

日時 4月29日(火)、5月5日(月)
午後2時～3時
 講師 大橋俊雄 (当館学芸員)
 会場 企画展示室 (入場料が必要です)



中山養福、鶴・旭に松図 (徳島県立博物館)。



守住貫魚、諾冉二尊・日月松竹梅図 (徳島県立博物館)。

いずも か も い わ く ら どうたく
出雲・加茂岩倉遺跡から大量の銅鐸出土

昨年10月、島根県の加茂岩倉遺跡（大原郡加茂町）から大量の銅鐸が出土したことはまだ記憶に新しいことです（写真1）。銅鐸が出土した場所は、10年ほど前に358本もの銅剣や銅鐸・銅矛が出土した荒神谷遺跡（簸川郡斐川町）から約3kmほどしか離れていません。丘陵地にある小さな谷の奥深くに位置する高さ20mほどの斜面のほぼ頂上近くで発掘調査が行われていました（写真2）。現場を見ての第一印象は「なぜこんなところに？」というものでした。

調査が進むにつれて発見された銅鐸の数も増え、最終的には39個となりました。これまで発見されていた銅鐸（約430個）のおよそ1割近くもの銅鐸が一度に同じ場所から見つかったのです。もちろん1カ所で見つかった例としては最多です。出土した銅鐸は詳細な調査が行われていますが、すでに多くのことが明かとなってきました。まず、大きな銅鐸の中に小さな銅鐸を納めた入れ子の状態で見つかるものが多いこと、シカやトンボの絵が描かれたものがあること、つり手（鈕）の部分に×印が付けられたものがあること、同範と呼ばれる兄弟銅鐸が多く確認されたことなどです。

徳島県から見つかった川島銅鐸（写真3、麻植郡川島町出土、外縁付鈕式2区画流水文銅鐸）も、11号銅鐸と同範であることが確認されました。同範銅鐸とは、銅鐸をつくる際に、同じ鋳型を使ってつくられた銅鐸です。新聞などで、出雲と阿波の深い交

流があったように言われていますが、兄弟銅鐸は、製作地が同じと言うだけで、出雲と阿波の交流を裏付ける直接の証拠にはなりません。

このように、加茂岩倉銅鐸の発見によってわかった事実と、さらにそこから考えられることには少々誤解があるようです。たとえば、出土した39個の銅鐸は、どのような材料でつくられているか、材料の原産地はどこかなどを調べるため、すべて化学的な分析をされることが決まりました。しかし、分析も万能ではありませんので、いつつくられたか、どこでつくられたかと言うようなことまではわかりません。

銅鐸は、どのように使われたのか、なぜ埋められたのかなど、いまだに多くの謎を持った遺物です。加茂岩倉遺跡での銅鐸発見は、いくつかの新たな銅鐸の謎を生み出しましたが、銅鐸の謎を解くためのカギになることは間違いありません。

今後も続けられるさまざまな調査に期待し、慎重に見守りたいと思います。

魚島純一（学芸員：考古・保存科学担当）



図1 加茂岩倉遺跡の銅鐸出土状況（加茂町教育委員会発行の絵はがきより）。



図2 加茂岩倉遺跡発掘調査現場。



図3 川島銅鐸【複製】（原品：辰馬考古資料館蔵）。

Q 溪流沿い植物ってなんですか？



A 最近では、^{けいりゅうぞう}溪流沿い植物という言葉が本や雑誌でよく取り上げられるようになりました。本州ではケイリュウタチツボスミレという新品種も見つかっています。

溪流沿い植物というは文字どおり、溪流沿いの川岸に生える植物のことです。川といっても、水草のように植物体全体が水に浸かっているわけではありません。普段は水に浸からない川岸の岩場に生えていますが、そこは大雨で川が増水した時には水をかぶるような場所（これを溪流帯と言います）なのです（図1）。

県の記念物（^{けいしょう}景勝）に指定されている徳島県^{なか}那賀郡^{わじき}鷲敷町の鷲敷ラインを歩くと、那賀川の岩場にさまざまな植物が生えているのを観察することができます（図2）。このような場所が溪流沿い植物が生えるところです。ここで見られる溪流沿い植物は、ナカガワノギクやアオヤギバナ、イワバノギク、ホンバコングク、ナガバジャジン、ヤシャゼンマイなどです。これらの植物と近縁な植物の葉の形を比べてみましょう（図3）。溪流沿い植物の葉は近縁種に比べて細く、^{りゅうせんけい}流線型をしています。那賀川の上流の木頭村や上那賀町は徳島県でも雨の多い地帯です。いったん増水すると、普段は水のこない岸辺にまで水があふれ、それが数日も続きます。溪流沿い植物はその^{たくりゅう}濁流の中に巻き込まれてしまいます。このような状況下では、できるだけ水の抵抗を少なくして増

水がおさまるのを待った方がよいですね。それで溪流沿い植物の葉は流線型をしているのでしょうか。

溪流沿い植物は林や野原のような増水とかかわりのない場所には生えていません。ナカガワノギクの中には田のあぜや山腹の斜面に生えるものもありますが、これは溪流沿い植物として分化した後に、溪流沿い植物ではないシマカンギクと交雑することによって、そうした場所への適応能力を取り込んだと考えられています。

人間にとって川が増水することは洪水のような災害につながるやっかいなものですが、ある植物にとっては生活する場を提供する大切なできごとなのです。

小川 誠（学芸員：植物担当）



図2 鷲敷ラインの岩場。ナカガワノギクが白い花をつけている。

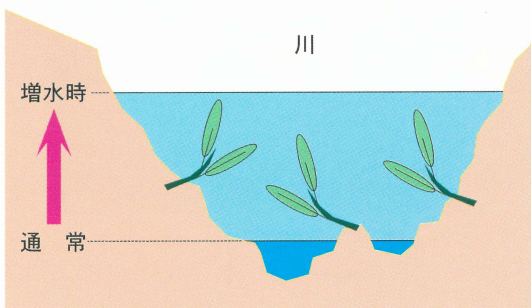


図1 川の水位と溪流沿い植物。

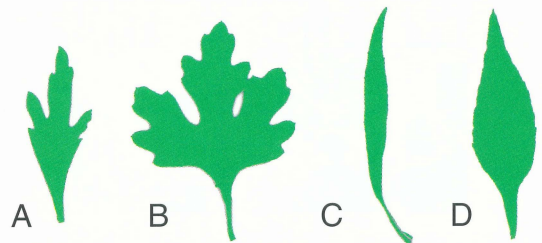


図3 溪流沿い植物(A、C)とその近縁種(B、D)の葉型の比較。A:ナカガワノギク、B:リュウノウギク、C:アオヤギバナ、D:アキノキリンソウ。

4月から6月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行 事 名	実施日	実施時間	対象（人数）
野外自然かんさつ	春の植物と昆虫	4月20日(日)	10:30~14:30	小学生から一般（30名）
	磯のいきもの（4月編）	4月27日(日)	13:30~15:30	小学生から一般（60名）
	磯のいきもの（5月編）	5月11日(日)	13:30~15:30	小学生から一般（60名）
	立川谷の地質見学	5月25日(日)	10:00~15:00	小学生から一般（30名）
土曜講座	※変わる縄文時代観	4月12日(土)	14:00~15:00	小学生から一般（50名）
	※地層を読む	5月10日(土)	14:00~15:00	小学生から一般（50名）
	※漂着物が語る世界	6月14日(土)	14:00~15:00	小学生から一般（50名）
室内実習	生物絵画大会	6月8日(日)	13:00~16:00	小学生から一般（15名）
歴史散歩	古墳見学	5月18日(日)	9:00~17:00	小学生から一般（45名） 貸切バス利用 徳島市~美馬町
企画展開連行事	※展示解説	4月29日(火)	14:00~15:00	企画展「阿波の近世絵画一画壇をささえた御用絵師たち」観覧料が必要です。
	※展示解説	5月5日(月)	14:00~15:00	
	※記念講演会『御用絵師と「お好み」』	5月11日(日)	13:30~15:00	小学生から一般（300名）
移動博物館	※講座「阿波の歴史」①「阿波の近世絵画一画壇をささえた御用絵師たち」、「銅鐸のまつり」	4月27日(日)	13:00~15:30	小学5年生以上から一般（100名） 海南文化館（海南町四方原）
	※講座「阿波の歴史」②「銅鐸をつくる」、「聖地と旅—巡礼の歴史」	5月25日(日)	13:00~15:30	小学5年生以上から一般（100名） 海南文化館（海南町四方原）
	※講座「阿波の歴史」③「県南の年中行事」、「百姓一揆と海部郡浅川の民衆」	6月22日(日)	13:00~15:30	小学5年生以上から一般（100名） 海南文化館（海南町四方原）

●※は申し込み不要です。その他は往復はがきでお申し込みください。（各行事の1カ月前から10日前までに届くように）

●くわしいことは博物館にお問い合わせください。

★11月3日（日）には、「博物館一日館長」を実施しました。県立博物館のシンボルカラー（青）のように、爽やかなイメージを持った源純夏さん（アトランタオリンピック競泳出場）に一日館長をお願いしました。源さんは、一日館長に任命されると、精力的に展示場の巡回を行いました。昼からの亀井館長とのトークでは、普段の水泳の練習の様子や、アトランタでの思い出を語り、会場からのたくさんの質問にも明るく答えてくれました。忙しいスケジュールのなか一日館長になってくれた源純夏さん、ほんとうにありがとうございました。

★11月10日（日）には、野外自然かんさつ「那賀川

の自然かんさつ」がバスを利用して行われました。コースは、那賀川町中島から那賀川を上流に上りながら、ナカガワノギクをはじめとした秋の植物を観察しました。美しく咲いたナカガワノギクは、那賀川と日和佐川のごく限られた範囲に分布し、シマカンギクとの雑種（ワジキギク）をつくるなど興味深い点がいくつかあり、参加者の関心をひきました。「鷲の里」での休憩の後、氷柱観音を訪れ、昼食は、鷲敷青少年野外活動センターでとりました。最後の観察地の相生町蛇ヶ淵では、美しいナガバノシャジンなど渓流植物が観察できました。

福島秀樹（普及係長）



「博物館一日館長」



「那賀川の植物かんさつ」

博物館ニュース No. 26

発行年月日 1997年3月25日

編集・発行 徳島県立博物館

〒770徳島市八万町向寺山 ☎(0886-68-3636)